



理事会だより (6・9)

一、各部報告 総務部・新会員清水美代子さん(沈丁) 会計部・会費未納は現在1名。

二 令和4年度小田原秋季俳句大会の実施細目について協会報をもとに説明・確認。会員への投句案内は当理事会で配布し、外部宛は本日発信した旨報告(長谷川事業部長、米山秋季担当理事)。会長より市長賞・教育長賞・市議会議長賞を準備していることの報告、なお市長以下の大会出席につき長谷川事業部長より申請予定。

三 秋の吟行会は11月8日(火)に大磯方面で会場検討中。(広報部)

(その他)○理事會前に事業部の新しい俳句大会担当者の顔合わせと業務内容の打合せが行われた。

○山北町俳句協会代表者変更…(新) 竹下由里子 (旧) 中山妙子

「俳句おだわら」10句抄(658号より)

近藤久江 抄出

健脚と言われる老の春帽子
にはとりの鎖き歩む彼岸寺
花衣たたむやふはり煙草の香
踏青や足の喜ぶ靴を選えり
はんりの風の吉日雛納む
散髪の缺の音も春めける
七色の風が踊るや春シヨール
緩る緩ると湘子の浜や桜貝
川音の饒舌となり柳の芽
地球儀のまはる軽さよげんげ咲く

畠 梅乃 抄出

鳥帰るやつぱりロシアしかない
東で買ふ不祝儀袋冴返る
踏青や足の喜ぶ靴を選えり
春の海泪あふれることもある
クリツクに弥撒の献金臈月
ひこばえや薬忘るる程に癒ゆ
春蟬や浅き眠りの夜勤明
春愁や木偶の息子と畑仕事
何事もメモに始まり翁草
散る桜朝はやさしくものを見て

和田恵美子 新井たか志 伊藤はる子 陌間みどり 田中 幸子 高橋 正子 下平 美子 村場 十五 石井千代子 畠 梅乃 尾崎 竹詩 尾崎 一夫 陌間みどり 寶子山京子 百川 秀子 守屋 まち 來田 新子 宮崎 悦女 井上 和子 穂坂志げる

藤田湘子記念小田原俳句大会

選者を担当して

佳句に出逢えた恩寵

池田忠山

「第三回藤田湘子記念小田原俳句大会」が、湘子命日の翌日四月十六日、新装の小田原三の丸ホールで成会裡に開催された。地元小田原が輩出した偉大な俳人の名を冠した大会だけに、小田原の俳人の一人として、ことのほか誇りに思う。コロナ禍の中、会場は入場制限があったが、入場者は三百名を優に超えたそう、壇上から見ても誠に壮観であった。

応募句約一四〇〇句余りの質は極めて高く、率直に言って選者としてこれほど選に迷ったことは滅多にない。その中から、大会賞に、当協会会員田渕令子さんの（点けて一人消して独りの夜長かな）が受賞したこと、ご同慶の至りである。

では、小生の特選2句を鑑賞してみたい。

花月夜大往生を遂げにけり

上田 鷺也

この句は、省略されている大往生を遂げた人がどのような人であるかを読者の読みに委ねた。そこでポイントの一つは、その人が大往生を遂げたという点。つまり、年齢に不足がなく、また、功成り名を遂げた方

だという推察が成り立つ。ポイントの二つ目は、上五の（花月夜）。つまり、満開の桜と満月である。

私は、この上五の（花月夜）をみて、西行の和歌（願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ）がすぐにびんと浮かんできた。（きさらぎ）は、旧暦の二月なので今では桜咲く三月。西行が歌のとおり没した享年は72歳。鎌倉末期の当時としては、正に大往生と言えよう。その業績は言うまでもない。つまり、この句はその主人公を、西行法師と読んでこそその一句なのだ。そう読めば「本歌取り」の手法が際立つ。省略も見事である。

産院の待合室や除夜の鐘

柏木 良花

夫や家族が誕生の知らせを今や遅しとやきもきして待っている産院の待合室での大晦日の光景が浮かぶ。しかしそのうちに除夜の鐘が鳴って、予定日の大晦日に生まれなかったのがわかる。私は、元朝の早晩になつて、産声が上がリ、待合室が喜びと安堵に満ちたに違いない、と信じた。

除夜の鐘をはさんで、生まれる前までと後からの、作者を含めた周囲の方々の気持の揺れと喜びの対比を滲ませて、類例もなく省略も秀抜である。

弟子の眩き

長谷川きよ志

選者となりて思いつくまま

山田照子

私は約五十年前、鷹小田原句会で藤田湘子先生に直接ご指導頂いた不肖の弟子の一人である。

今大会に小田原俳句協会の選者として参画出来た巡り合せを光榮に思うと共に、湘子先生にご恩返し出来たと自負している。湘子先生から学んだ一つに「季語を修飾するな」の教えが印象に残っている。

この教えを念頭に置いて次の三句を特選に頂いた。
爽やかや海風撫ぜる湘子の碑

中村 昌男

小田原文学館の庭園にある「愛されずして沖遠く泳ぐなり」の湘子先生の句碑。今回の応募作品の一四四四句の中から的一句は奇しくも我が小田原俳句協会会員の作品。中村昌男さんは各地区の俳句大会でしばしば上位入選する言わば俳句巧者。選句した私に天晴！

天守より海境淡し初桜

明地敬子

小田原の風物詩である桜と天守閣のコラボの作品。
立葵誰も帰って来ない村

吾亦紅

立葵は盛夏に咲く花故、夏休みの帰省の句と推察。コロナ禍で帰省出来ない子供を待つ家族の心情が吐露され切ない。

以上三句共、季語を修飾せず季語の持つ力を十分発揮した佳句と言えよう。

昨年の九月より三ヶ月間、藤田湘子記念俳句大会の作品募集があり、応募作品一般の部一四〇〇句小中学生の部に一六〇〇句合せて三千句以上が寄せられました。選者として沢山の作品に触れる事は初体験で、身の引き締まる思いが致しました。その中で私が特選に頂きました三句は

長き夜や母の声音のぐりとぐら

皆春

秋の夜の親子のほのぼのとした様子に心動かされました。母の声音がいいですね。

東京を鞆に詰めて帰省かな

山内 基成

コロナの中久しぶりに帰省、鞆に詰めたものは何んでしようか、想像がふくらみます。

腹に息溜めて抱き上ぐ今年米

椋本 望生

収穫の喜びと充実感が感じられました。

それぞれ個性ある生活感のある句に共感を覚えました。

さて四月の天気当日は、花冷えの日でしたが、小川軽舟先生始め高柳、奥坂、岩永諸先生との出会いは大変貴重な経験となりました。俳句を通してお目に係れた御縁に感謝申し上げます。先生方の講評も的確で特に高柳先生は分かり易く、子供達に響いたのだと思います。次の大会も期待しております。

蟻地獄 青木たけを

過ぎし日の悔いの数々露の臺
 春愁をはみ出す凄まじき戦果
 ぐちやぐちやと枇杷の花咲き実となりぬ
 地震続く春の列島平等に
 戦争は必要悪か昭和の日
 太陽の裏側見たり夏の月
 ビール旨し車卒業まあいいか
 蟻地獄情状酌量なき裁き
 お互いの老いを労り冷奴
 夏草や兵役制度残る国

実梅 小澤 純子

水鳴る方へひしめきて水芭蕉
 晴れに来て雨にも来むと菖蒲園
 鳴き出してたちまち輪唱雨蛙
 青梅や母と歩みし曾我の里
 まろびたる実梅の音の中に母
 なみなみと日ざし泰山木の花
 そよと揺れやがて大揺れ蓮の花
 水辺には風立ちやすく糸蜻蛉
 闇ゆるむ時のち果て月下美人
 白南風やパリより届くエアメール

俳句おだわら (6・19メ切り、到着順)

◆山北 (5・26)

由里子報

しんがりは父の自転車若葉風

和田恵美子

ベッド越しのわかば若葉や二度生きる

尾崎 幸子

水打って風のかたちをくずしおり

中山 妙子

戴帽式の記念写真や風光る

尾崎 竹詩

棕櫚の花スリッパを干す診察所

石田加津子

スクワットの途中ががんば横切つて

竹下由里子

◆小田原鹿火屋 (5・27)

久江報

御柱祭木遣りが曳いて風が押す

足立 和子

調教の馬の並足風薫る

川本 育子

風薫る齢育む心地して

高橋 小糸

山法師傘をななめに街を行く

山崎 悦子

蜘蛛の囀に囚はれ朝の雨三粒

近藤 久江

◆香雨・梅ごち (5・22)

忠山報

どこまでも道どこまでも麦の秋

肥後ちさこ

特大の母のおにぎり麦の秋

関戸わよこ

麦秋や村ぢゆうの穂がひと色に

青山 典子

朝掘りの筍ひとつお裾分け

門松 鳳文

草庵の静けきままに梅雨入かな

吉田 百代

やぶじらみ 小島ノブヨシ

浜昼顔や戦など知らぬふり
 踵踏みつぶし地獄の釜の蓋
 十二単恋の未練は幾重にも
 鰻つかみ腹を探られるたりけり
 犬のふぐり神田生れは左利き
 藪虱うしろの正面だあれだ
 継子の尻拭ひ母の顔思ひ出せぬ
 婚札の暮れぎは燕ひるがへり
 水薬の目盛り羽蟻の飛ぶ夕べ
 頓服や平たくなりし蟻地獄

夏 小野菊土

半夏生ボーダレスとなるマスク
 夏草やシリア・ミャンマー・ウクライナ
 斑猫に道を問いている不惑
 早苗根を張る校庭に声響く
 瓦にもその気になれば夏の草
 赤牛の涎垂らして日の盛り
 ウクライナから見える大虹ロシアにも
 羅や胸裡に熱き思い秘め
 地下鉄が陽光浴びし更衣
 あんパンが空から落ちてきて夕立

大声で交はず挨拶麦の秋

子が分けてくるる一粒さくらんぼ

流れにも風にも夏の匂ひかな

改札に鎖骨がどつと夏来る

◆こよろぎ(6・9)

日差しうけ右往左往の羽抜鶏

曳き売りの井戸水もらふ初鱈

空梅雨や車の音と地の音と

◆青梅(6・8)

菜の花や真青な空に願回事

千年の雨露越えてきし椎若葉

濃淡の雫こぼれり七変化

梅雨蝶の群れては沈む野菜畑

湯治場の小さな朝市籠の茄子

十葉やみんなはじめて老いの坂

◆春野(5・29)

暁の帳押し上げ桐の花

卯波立つ肩・腰・膝に貼る湿布

天窓を開け夏雲を迎へけり

就中虚心坦懐心太

ゼリーぶるぶる定型を保ちをり

吉田 康雄

陌間みどり

小澤 純子

池田 忠山

つとむ報

板谷 雅泉

植松テル子

神山つとむ

幸子報

大塚 行人

湯本とし子

加藤まり子

久保寺トミ子

田淵 令子

田中 幸子

きよ志報

秋山 昇

伊藤はる子

内田知江子

尾崎 一夫

瀬戸 悠

ほどほどの 杉山あけみ

三月の風トローチの輪を抜ける
 右肩が凝っていますねチューリップ
 旧交はあたためるもの種浸す
 春蚊とびまわる正解知りたくて
 月朧毛細血管消えそうです
 エイプリフルコロツケほつかほか
 つと触れてみる連翹の黄のゆううつ
 鳥雲に入るやオブラートのへらへら
 クリップで止める春愁の弾力
 ほどほどの距離感竹は皮を脱ぐ

青～蒼～エナメル 杉崎せつ

蛇若し開きたる口中の真つ赤
 掌に囲ふグラスのくもり熱帯魚
 アニソンは叫びてをはり梅雨入る
 オカリナに籠る土の香蓮見舟
 あをぞらや一層蒼き夏の富士
 相州に鶏の眼絶し夕立雲
 犬遁走畔うろろと夏至夕
 はんざきの谷エナメルにエモくあり
 軍鶏の箱一個づつ積み夕薄暮
 日月の進捗早しアマリリス

好き嫌ひ言うて寂しき晶子の忌
 ごきぶりの疾走庫裏の長廊下
 ◆みなみ(5・14)
 陣屋跡訪ね又会う合歓の花
 満塁に沸くスタンドや雲の峰
 青空に喉をうるおす新茶かな
 花は葉に婆膝まづく白地蔵
 マシーンの快音響く新茶刈り
 眠る子の薄き爪切る合歓の花
 新緑へ手足ゆるめて瞑想す
 バナナ程背なを反らせて体操す
 ◆沈丁(6・4)
 夕立ちやマスク外して走る走る
 どの庭も出入り自由の夏の蝶
 リズム体操二羽の夏蝶遊び来る
 一陣に青条揚羽空に出る
 フルートの調べにつられ夏の蝶
 夏蝶を目で追って来賓の話
 夏野菜甘酢・葉味に昼餉かな
 揚羽蝶ふふの翅とるの口
 汽車走る町を眼下に実梅もぐ

二見 和江
 長谷川きよ志
 かほる報
 斎藤 静
 加藤 健治
 小瀬村信子
 加藤れい子
 加藤 富江
 豊田 幸枝
 市川めぐみ
 加藤かほる
 寶子山報
 中野 文子
 若村 京子
 柳澤ミサ子
 田中 恵一
 河本 純子
 瀧本 敦子
 勝木 澄子
 菅野 英余
 高井 幸子

風光る 豊田幸枝

囀やゆすつて冷ます哺乳瓶
うららかや売物の猫よく眠る
信濃路の沢水ゆたか山の独活
登るほど径細くなり山桜
沐浴の大きな欠伸柿若葉
揺り籠のようなせせらぎ柳の芽
万緑や風の膨らむ河童橋
菓子折に亭主敬白新茶汲む
皺深き漁夫の横顔土用波
叱られて猫捨てて行く十三夜

鳥唄 瀧本敦子

散骨がいい南風となり空へ海へ
恐竜の声を問われるさみだれる
少年は寡黙かさりと蟻地獄
熱帯夜呪文のように独り言
雉鳩の唐突に止む夏朝
歩をゆるめゆるめ夏蝶まで少し
夏蝶の翅の湿りの微かなり
選ばれて浅葱斑になりました
行方不明放送アサギマダラが渡る
夏蝶の声だろうか、あれは鳥唄

夏蝶や物憂いときの窓広く
初デート迷いし服に風蝶あひは舞う
殺虫剤よせば良かった揚羽蝶
マゴノ手がおいでおいでと夏の蝶
口語体のやうに消えたる瑠璃揚羽

◆おほゐ(6・8)

あれこれと言ひ合う仲間新茶飲む
十葉や安心を買う常備薬
蛍の灯兄の手渡し小さき手に
川風にいとしさ照らす初蛍
蛍火の闇にみだれや今昔
ときめきは蛍袋に預けおく
昇る陽に望みを託し山開き
蛍田に足柄の風そよそよと
迷宮の恋の行方や蛍の夜
梅雨寒や心湿りの時来たる
額の花雨呼ぶように咲き出しぬ
故郷の変わらぬ山河梅時雨
遠い日や蛍飛び交ひ皆がいた
後戻りせぬと決意の蝸牛
嘆きたきこともあろうに蟾半眼

片野 節子
峯尾ユキエ
河本チヨ子
清水美代子
寶子山京子
秀泰報

中津川晴江
石井千代子
廣田 悦子
風間 秀泰
高橋みどり
中根登美子
香川 花子
坂入清四郎
小野 菊土
中村 昌男
加藤 春江
瀬戸とみ子
二上 光子
石井きよ子
横塚 昌平

◆鷹(6・4)

十五報

田水張る眼休めの穂高岳
 目交まなまやふいに梅雨蝶鮮らけし
 放流のサイレン響くゆすらうめ
 巴里祭や母のバッグのプチポアン
 海を背に頂上目指すみどりの日
 立て札の読んで忘れて薔薇真つ赤
 百合の蕊とりて供花とす雨もよひ
 先づ父に新茶一杯供へけり
 諷経めく婆のオラシヨや繡毬花
 鳳凰に波のしぶきや神興渡御
 追伸に再会約す桐の花
 夕映に葦のそよぎや蛇の衣
 朝靄は谷のぼりけり朴の花
 出帆の銅鑼届きけり薔薇の門
 ロボットの忠実な給仕や柏餅
 歩きつつ練る草案や柿若葉
 白蝶まんとしとあの卍まんじ巴へや庭薄暑
 野に拾ふ鴉の羽や夏帽子
 寂聴読む風にくくらむ夏暖簾
 星涼し旅の写真に詩を添ふる

青木 孝子
 西賀 久實
 佐宗 欣二
 須田 晴美
 中田 笑子
 百川 秀子
 山崎美知子
 柏木 良花
 庄司 下載
 瀬戸 りん
 高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 大木 敬子
 大島美恵子
 田下 昌人
 中根 和子
 加藤 幾代
 守屋 まち

掘割の水音ゆたかや翡翠飛ぶ

人住まぬ家に満開立葵

洋服はMからLへトマト挽ぐ

同じこと言ふてるつもりソータ水

紫陽花の小径に傘を傾げ合ふ

蛇のでる暑き地獄やかき氷

仰ぎ見てブラッド・ビット夜の新樹

早世の父に父の日無かりけり

仏法僧星のなき空あはれなり

わが丈を越す紫陽花に耳澄ます

◆実のり(6・16)

柿若葉夕日に沈みて一ト日過ぐ

研ぎ立ての包丁軽し柿若葉

麦秋や先に上がると妻のいふ

谷風や白を重ぬる山法師

◆たけのこ(6・15)

水馬水を平らに後ろ足

命日のトマトふたつを吾子の日に

これでよく遊んだものだハツ手の実

庭隅の蛍袋に雨雫

亡夫の車孫に約束六月来

米山 翠
 來田 新子
 大沢 年子
 片野 秋子
 小林 環
 下平 美子
 杉崎 せつ
 鳥海 壮六
 古屋 徳男
 村場 十五
 たか志報
 岩本ひさみ
 杉本 久子
 木村 幸枝
 新井たか志
 悦女報
 久津間百合子
 徳田 公子
 小宮 早苗
 三木 泰子
 宮崎 悦女

◆零（6・16）

史郎報

那須縦走落とした財布届く夏

青木たけを

卒寿超え幸せなのか迷う夏

井上 良子

行けどもいけども頂きのなき登山

伊藤 道郎

背の高き私の肩へ夏の草

川合 昌子

登山小屋秘湯につかり山の恩

佐藤 正子

さやぎつつ喜び震う新樹かな

中村 裕子

つがみ
梅海新道（燕新道）苦節十年山開く

野川木 一路

花茨未来図描く我が道に

岡本 史郎

◆草むら（6・18）

重満報

西瓜の花楽しみだけが輝けり

石井 秀稀

何しても妣に似てるや白木槿

井上 和子

幼な児の昼寝の脳はしとどにて

佃 悦夫

電降るや干戈なき国のオロオロ

佐々木重満

◆無所属

アイロンの消すはんかちの喜怒哀楽

小林永以子

卒業の息子お袋と呼び始む

蓑宮 わか

水中花だれにでも咲く幸不幸

大佐田俊美

麦秋や地球儀に見る紛争地

一ノ瀬茂代

山法師十字十字に咲き通す

出澤 洋子

わかりあふごとく海月のひらきあふ

島 梅乃

路辺割れ目に懸命に咲くカンパニユラ

鈴木久美子

信号右折目の前の泰山木

岩橋惠津子

御田植の陛下白シャツ眩しめり

山口 千代

新樹光石の祠の白き紙垂

山田 照子

墓掘りの風上におく梔子の花

穂坂志げる

直線に足跡からむ代田かな

須田 聡子

咬み合はぬ話も笑ひ時計草

木村美千代

手の平に乗るほどの愚痴青嵐

田畑ヒロ子

空っぽだから何でも入る春の穴

大石 雄介

森青葉白いネクタイ白いい滝

大石 和子

やはらかなパンやはらかな日の盛

瀬戸 正洋

ヒップホップやらせてみたし大百足虫

小澤 園子

蝸牛ハザードマップを確認す

岡田 典代

雨虎こらで一服しませうか

小島ノブヨシ

すれちがう思惑ゆらり花馬酔木

杉山あけみ

合戦の涙の如し群れ螢

木村予史重

翠

象小屋の重き鉄扉や夏つばめ

青柿や漬物小屋のトタン屋根

状差に令書数多や冷奴

ボート漕ぐ夫の腕力衰えず

似顔絵屋香取線香腰に下げ

新作5句

米山

夢新た／高橋正子遺句抄（守屋まち抄出）

メーデーやわれにかかげる旗のなし

鳥渡る昆布干場にシャツ干して

桜葉降る日時計のくるひなし

月あげて東塔凜と年惜しむ

身につきし食養生や青瓢

薔薇赤し今青春の戦中派

竹皮を脱ぐ乙訓の月あかり

鹿の子に水煙の空深くあり

灯りなき書斎の月日秋彼岸

ひとり居の月日は速し実南天

薔薇赤しわが晩年の夢新た

出航の外国船や荷風の忌

直向きに

守屋 まち

正子さんは「鷹俳句会・小田原」前身の市図書館教養講座「俳句のたのしみ」（講師は藤田湘子先生）を受講され、以来四十年余り、俳句と共に歩まれました。

家庭ではご夫君を送られてからは、骨折なども乗り越え、二十年ほど一人暮しをされました。「俳句があったから、母はこの年まで頑張れました」とご子息が言われるように、主宰指導の東京中央例会に高齢まで意欲的に出席され、また俳句協会の俳句大会にも必ず投句・出席をされました。

自然を見つめた句、生活に根ざした句、又ご家族で旅をされた時の句をよく作られました。真面目で穏やかな方で、句会での正子さんの評に皆、耳を傾けました。小田原での句会の最後は、最期を迎えられる一週間前のことでした。

「薔薇赤しわが晩年の夢新た」（令和三年作）と詠まれているように、これからまだまだ夢に向かおうという矢先の訃報にただ驚くばかりです。終生俳句を友とし、直向きに取り組まれた姿勢を見習いたいと思います。

享年九二歳。合掌。

高井幸子 (おおいゆめの里俳句大会より)

うららかや風の私語聞く野のベンチ 川本 育子

心地よい春の空気に包まれたのどかな感じがします。工藤直子さんの「のはらうた」を読んでいるようです。風はどんな話をしながら通り過ぎてゆくのでしょうか。野のベンチは、風さんの話すあちこちの春の様子を楽しみに聞いていることでしょうか。

いろいろな空想が広がる楽しい俳句です。

中根和子 (令和4年4月号より)

摘草ややはらかき風頬にあり 古屋 徳男

「おい、出た頃じゃねえのか」と毎年呟く夫の声に促され、酒匂の土手にでかけ蓬摘みをしたものです。巡りくる春に力強く芽吹いた野草たち。蓬、土筆、芹などなど。柔かい日射しと心地良い風の中で一つ一つ摘んでは自然の恵みを頂戴する。遠い山脈、流れる雲、鳥の囀りまで聞こえてくる。摘草でさぞおいしいものが出来た事でしょう。優しい言葉の並びに心癒される句。

中村裕子 (令和4年4月号より)

新しく墓誌に亡夫の名春浅し 宮崎 悦女

人との別れは本当に辛く悲しいことです。まして身内の方とは尚更のことです。「春浅し」の季語を置かれたことに感銘しました。

亡夫様への思いを抑制して作者の心情を、やわらかい、やさしい情緒的な季語に委ねている。この季語によつて言い表わせない程のたくさんの思いが伝わってきます。

寒く冷たく感じられる雨が早く温かく感じられますように。

古屋徳男 (令和4年4月号より)

耳遠くなり縁遠くなり春近し 長谷川きよ志

人は寄る年波には勝てず、加齢と共に五感が低下し、補聴器、眼鏡時には杖の支えも必要。掲句は私と重なる。難聴で補聴器を付けても会話が難しい事もあり、またコロナ禍の外出自粛で親戚友人と疎遠になり勝ちです。しかし大丈夫だと「春近し」の季語が訴えている。春爛漫も近い。人生七転八起、堅忍不拔、私を励ます様で惹かれました。

令和4年度小田原秋季俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「新涼」「木槿」(いずれも傍題可)各一句

一組 未発表作品に限る。

締切 令和四年七月二十九日(金) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250・0851 小田原市曾比二四三二

米山 翠苑(☎〇四六五―三六―四五九〇)

*作品は投句原稿どおり印刷しますので、楷書で、

大文字、小文字をはっきりとお書き下さい。

*第二部への参加・不参加もご記入下さい。

選者 協会役員及び各地有力作家

賞 小田原市長賞以下二十位、選者特選賞

第二部 俳句大会

日時 令和四年十月二日(日)

会場 おだわら市民交流センター(通称UMECO)

受付 十一時 投句締切十二時

開会十二時半 終了十五時半(予定)

整理費 五百円(呈飲み物)

当日題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下五十位

*お願ひ 会場では今のところ飲食可能ですが、食事は各自で済ませてご参集下さい。マスクの着用及び感

染防止対策(会場での手指の消毒、三密回避等)にご協力下さい。

*なお新型コロナウイルスの状況によっては第二部の中止もありますことをご了承ください。

★当協会員で令和三年十一月四日(文化の日俳句大会翌日)から四年十月二日(秋季大会当日)に満年齢で還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する寿齢者への恒例の表彰を行いますので該当者は奮ってご投句下さい。(表彰は投句条件)

〈主催〉小田原俳句協会 〈後援〉各地俳句協会

無所属会員の皆さまへ

毎月作品発表の機会として全会員に「俳句おだわら」のコーナーを用意しています。無所属の会員の方も是非投句下さいますようお願い致します。

締切は毎月19日必着です。

(広報部)

宛先…250・0042 小田原市荻窪五四九―一七

村場十五

理事会日程

7/14、8/11、9/8、10/13
いずれも木曜日 けやき(開始は15時に変更)